

## 音楽家顕彰活動における継承と創造

### —東海林太郎直立不動像の建立と関連事業に着目して—

#### Inheritance and Creation of Musician Honoring Activities: Focusing on Erecting the Upright Statue of Taro Shoji and Related Events

井 上 裕 太  
Yuta Inoue

#### はじめに

歌手、作詞家、作曲家ら音楽家の顕彰とは、博物館、顕彰碑、音楽祭等の事業展開を通じ、その功績を市井の人々へ広く認知させることである。しかし、その顕彰をめぐるのは、音楽家個人の博物館の休館・閉館、歌碑の移転・撤去、顕彰団体の休会・解散等の事案が近年頻発している。これらは、音楽（特にポピュラー音楽）の「時間の経過とともに徐々に忘れられていく宿命」にあり、次世代に継承されにくい」という特性が背景にあると言えるだろう。1980年代以降、様々な顕彰が行われるようになった<sup>1)</sup>が、これまでは活動の断絶が問題として意識されることは少なかった。しかし、担い手の高齢化、新規参加者の減少による人材面、財政面の不足等の問題に直面し、顕彰活動の消滅危機にある今だからこそ、この課題に向き合うことが求められる。一度消滅した活動を復活させることは困難であり、音楽家と地域との繋がりが埋没する危機にあるのが現状である。

その一方で、秋田県秋田市出身の歌手・東海林太郎（1898年～1972年）に関する顕彰活動は、東海林の没後も継続的に実施されている。常設的に東海林ゆかりの資料を紹介する東海林太郎音楽館以外にも、2021年には東海林太郎直立不動像が建立され、没後50年にあたる2022年には、展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」や、東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」が開催されるなど、没後半世紀が経過してもなお顕彰活動は盛んであり、その功績を現在に伝えている。

昨今の音楽家顕彰活動の状況を踏まえると、音楽家の功績を伝えるにあたっての要点は、「いか

に次世代へ継承するか」「いかに新たな顕彰事業を創造するか」の2点に集約される。そこで本稿では、東海林太郎直立不動像の建立とその関連事業に着目し、「継承」と「創造」の観点から、音楽家顕彰活動の現在について考察する。

#### 1. 先行研究

音楽家の顕彰という観点から論じた直接的な先行研究は、後述の音楽博物館の立地に着目した事例（山田 2013）、ウィーンにおける顕彰活動に着目した事例（阿部 2021）が確認できる程度である。そこで周辺領域の先行研究も含めて渉猟し、音楽と顕彰をめぐる研究の現在地を素描する。

博物館学においては、博物館の中にコンサートホール、楽器修復所、映画館等の様々な機能を内包し、観光資源としての中心的役割を博物館に担わせるバリ音楽博物館のモデルの分析（水嶋 2000）が、音楽博物館の持続可能性の観点からの先行研究として挙げられる。これは、一時的な事業展開ではなく、長期的視座による分析を行った点が特徴である。

また、近年、ポピュラー音楽に関する博物館は、スポーツ、漫画とともに、ポピュラー文化博物館の一部と位置付けられ、その重要性が認識されるようになった（石田・村田・山中 2013）。しかし、従来の博物館が取り扱ってきた学問領域の域外にあるため、ポピュラー文化の専門知識を持ち合わせた専門職員（学芸員）が少なく、一方で当該分野の知識を有する業界関係者やコレクター等は逆に展示に関する専門知識は持ち合わせていないというジレンマを抱えているという状況も明らかにされた（村田 2016）。

一方で、経済学の視点からは、次の3例が主たる研究として挙げられる。

1 例目は、伝統芸能の振興の在り方に関する論考である。発祥地で保存された芸能が、都市部に進出し多くの人々やメディアに消費された後、改めて元の地域への「再・埋め込み化」を図ることで、住民や観光客は真正性と多様性を体験でき、地域社会が持続的に発展できるとする提言がなされている（和田 2017）。一方的に地域社会で情報発信するのではなく、都市部の人々にその魅力を発信し、興味を持って訪れた観光客に対し、地域社会を構成する一要素として伝統芸能を披露することで、地域そのものの魅力を観光客が受容できるとする指摘であり、文化の継承という観点に立った研究である。

2 例目として、日本国内の音楽家個人の博物館について立地をもとに分類を試みた研究（山田 2013）が挙げられる。この研究では、博物館が「出身地等の縁故地への立地」と「縁故地以外への立地」に大別され、前者については「新設された、当初から博物館等展示施設として使用するという前提で用意された建物に入っているもの」と「既存の施設に後から入る形で開設された展示施設」に細分化された。更に、「出身地等の縁故地への立地」の事例に限定したものではあるものの、今後の在り方として、真正性の演出・可視化、ガイドの育成、関連施設との連携等が示唆され、音楽家の博物館が地域振興に資するための具体的提案がなされた。

3 例目は、ベートーヴェン、モーツァルトらウィーンゆかりの音楽家の顕彰実態を明らかにするなど、音楽家の顕彰に直接的に言及した論考（阿部 2021）である。ここでは、ウィーンという街そのものが音楽の「聖地」として息づいてきた歴史的事実を踏まえ、「聖地」の行政や経済活動の中での意味付けの必要性について説き、顕彰の意味を込められて建立された像や墓地についても「聖地」として捉えている。更に、顕彰という明確な目的のもとに整備されることによって観光資源となるものがある一方で、整備がされていないところでも、「聖地」として実質的に観光地となり、場合によっては観光資源となることもあり得ると説いた<sup>2)</sup>。このように、音楽家ゆかりの地が聖地

化する過程においても、意図的な介入があるケースと、自然発生的なケースがあると指摘した。

以上のように、従来の研究では、博物館学の観点からは、ポピュラー音楽家個人の顕彰について向き合った研究はなされてこなかった。また、経済学の観点からは、観光や地域振興と絡めて議論はされていたが、そもそも顕彰活動の定義や体系化がなされている訳ではなく、活動を持続するための「継承」と「創造」を意識したものでもなかった。

こうした先行研究がある一方で、筆者は音楽博物館の発展可能性の観点から、現代において持続可能な形で音楽博物館を発展させるためには、博物館、地域住民、研究機関の相互連携が不可欠であることを指摘した（井上 2016）。これは、北海道新冠郡新冠町、静岡県浜松市、岐阜県大垣市、鳥取県鳥取市等に見られる、音楽を活用したまちづくりを根拠としたものである。

また、音楽家の顕彰活動という観点からは、美空ひばりと石原裕次郎の展示施設の変遷について明示した。ここでは、ファンを取り込んで多くの来館者を得ていた過去、ファンの高齢化や来館者の減少により、大規模施設ではなく生家の公開や不定期的な巡回展開催等、無理のない形でファンを対象に運営する現状について分析を試みた（井上 2017）。

更に、本稿で取り上げる東海林太郎については、同じく秋田県出身の歌手・上原敏とともに、顕彰活動と博物館の関係性について調査し、大館市における時報としての上原敏の楽曲放送、秋田市における東海林太郎音楽祭での出身校校歌の合唱等を根拠として、地域住民との対話や行政、教育現場との協力関係構築の重要性を指摘した（井上 2015）。

従来の筆者の研究は、博物館の活動を中心としたものであったが、顕彰の全体像を明らかにするには、博物館学の範疇を超え、「顕彰」という大枠においてこれらの抱える問題と対峙することが必要である。そこで本稿では、東海林太郎直立不動像の建立やそれに付随する関連事業に着目し、「継承」と「創造」の観点から、顕彰の本質について捉えることを目的とする。

## 2. 音楽家顕彰活動の特性

### (1) 顕彰の種類

筆者は、音楽家の顕彰活動を継続性の観点から、「恒常的顕彰」「定期的顕彰」「一時的顕彰」の3つに大別した。そこで、それぞれの特徴について概説する。

「恒常的顕彰」は、博物館における常設展示（写真1）や顕彰碑の設置（写真2）等、期間を限定せず誰もが自由に顕彰対象者の功績に触れることのできる性格のものを指す。博物館は開設後も継続的に運営に関与する必要があり、陳腐化を避けるためにも、存命の音楽家の場合は情報の更新が



写真1 ABBA THE MUSEUMの展示風景（2015年9月12日、スウェーデン・ストックホルムにて筆者撮影）



写真2 「釜山港へ帰れ」の歌碑（2017年3月27日、韓国・釜山市にて筆者撮影）

必要であり、物故者の場合は企画展示や展示替え等、展示更新を行うことが望ましい。顕彰碑は設置が目的化される傾向にあるものの、設置後も後述の定期的顕彰、一時的顕彰等と組み合わせて事業を展開することで、顕彰の埋没化防止の一助となり得る。

「定期的顕彰」は、音楽祭、カラオケ大会、慰霊祭等、数ヶ月に1回、年1回等、定期的に開催される事業を指す。音楽分野の顕彰活動には、参加者自らが歌唱等の形で能動的に顕彰に参画できる特性のものも含まれ、一方的な講座の受講等、受動的要素の見られる顕彰事業と峻別する大きな要素である。こうした要素を含む内容が、定期的顕彰には顕著に見られる。例えば、青森県つがる市で開催されている「上原げんと杯争奪のど自慢大会」は、郷土出身の作曲家・上原げんと功績を讃えたもので、2022年には44回目を迎えた。また、毎年寺山修司の忌日に開催される修司忌では、三沢市寺山修司記念館内の寺山修司顕彰文学碑に花が手向けられる。同様に、上原敏の忌日に開催される流転忌（写真3）は、秋田県大館市桂城公園内の顕彰碑前で行われ、代表曲の歌唱等を通じて、その足跡に思いを馳せる性格のものである。修司忌や流転忌のように、顕彰碑の前で定期的顕彰が展開される事例も確認できる。

「一時的顕彰」は、1回限りの記念事業を指す。「生誕X年」「没後X年」のように、周年行事として行われることが多い。2019年に作曲家・古関裕而の没後30年を記念して、故郷の福島市で開催されたコンサートでは、代表曲の合唱や自伝の朗読が行われた<sup>3)</sup>。また、2008年に上原敏の生



写真3 上原敏の慰霊祭・流転忌（2018年7月29日、秋田県大館市にて筆者撮影）

誕 100 年を記念して東京・浅草公会堂で開催された展示会では、写真や絵画を通じて、上原の人柄に触れることのできる内容となった（朝日新聞社 2008）。

博物館での永続的な展示や顕彰碑の設置を行ったとしても、展示替えや関連事業の定期開催が無ければ、真新しさが損なわれ、興味・関心は次第に薄れてしまう。一方で、一時的顕彰の実施により、刹那的に人々の関心が高まったとしても、継続的な顕彰活動そのもののへの興味を繋ぎ留めなければ、地域における音楽家の認知度低下に歯止めがかからない状況となる。そのため、それぞれの顕彰活動の性格を理解した上で、複合的に顕彰を推進することが重要である。

## （2）顕彰活動における継承性

1980 年代以降、各地で特に頻繁に行われるようになった顕彰活動は、昨今、衰退の一途を辿っている。

博物館では、1991 年に開館した石原裕次郎記念館が 2017 年に閉館、2002 年に開館した北島三郎記念館が 2021 年に休館するなど、開館から 30 年未満で休館・閉館する事例が相次いでいる。両館とも民間の運営する施設であるが、博物館活動を次世代へ継承する難しさが窺える。休館・閉館理由を探ると、石原裕次郎記念館（写真 4）は、ファンの高齢化等による入場者の減少、海沿いという環境に起因した建物の塩害被害、映像機器更新の予算不足等が挙げられる（読売新聞社 2016）。入館者減少による収入減に起因して、経年による施



写真 4 石原裕次郎記念館の外観。海沿いに面していた（2013 年 7 月 12 日、北海道小樽市にて筆者撮影）

設の老朽化・劣化への対応、映像機器更新への対応が難しくなるという状況が読み取れる。また、北島三郎記念館は、休館の理由として、建物の老朽化を挙げており、開館から 20 年近くが経過して、経年による老朽化への対応が急務となっている状況が窺える<sup>(4)</sup>。なお、この問題は日本国内に限ったことではなく、例えば歌手・テレサ・テンを顕彰した台湾・高雄市の鄧麗君紀念文物館（写真 5）は、施設の老朽化により 2015 年に閉館に至った。

顕彰碑では、2020 年に長崎市の「長崎の鐘」の歌碑（写真 6）が撤去された。「長崎の鐘」は原爆の犠牲者を悼んだ楽曲であり、原爆の被害に遭った浦上天主堂前の天主公園外壁に歌詞が彫られていた。しかし、公園の見通し改善やバリアフリー化を理由に撤去され、復元は予定されていない<sup>(5)</sup>。「長崎の鐘」の歌碑の場合、公園への転落防止のための外壁としての機能が設置の主たる目的であり<sup>(6)</sup>、副次的に壁面に歌詞が刻まれたものであった。そのため、あくまでも「外壁」という認識のもと、撤去に至っており、歌碑としての価値を設置者である長崎市が見出していた訳ではなかったという背景がある。

カラオケ大会に着目すると、先述の「上原げんと杯争奪のど自慢大会」は、歌唱曲を上原作曲の作品に限定しないことで、上原の楽曲を知らない世代も含めて、誰もが自由に歌唱曲を選択し出場することができる。そのため、上原の楽曲自体の顕彰という意味合いからは離れるものの、上原の名前を大会名に冠することで、上原の存在そのものの継承には繋がっている。一方で、宮城県大崎



写真 5 鄧麗君紀念文物館の展示風景（2015 年 3 月 5 日、台湾・高雄市にて筆者撮影）



写真6 「長崎の鐘」の歌碑 (2014年9月12日、長崎県長崎市にて筆者撮影)

市で開催されている「フランク永井歌コンクール」は、郷土出身の歌手・フランク永井の楽曲を歌い継ぐことを目的としており、歌唱曲をフランク永井の楽曲に限定しているが、2019年までに11回開催されており、永井の功績を継承するための取り組みとして模索が続いている。しかし、コロナ禍においては顕彰活動の停滞という問題も発生しており、「フランク永井歌コンクール」は2020年以降、第12回大会の延期が続いている(2022年時点)。

なお、コロナ禍による活動停滞の事例は全国的に起こっており、先述の流転忌も、2020年以降中止が続いている状況である(2022年時点)。コロナ禍は、通常であっても継承の難しい音楽家顕彰活動に、追い打ちをかけており、顕彰団体の休会・解散等の問題がより一層、顕在化しつつある。そのため、次に挙げる「創造」された活動においても、「継承」を念頭に置くことの重要性はより増していると言えるだろう。

このように、継承性の観点では、「時間の経過とともに徐々に忘れられていく宿命」にあり、次世代に継承されにくい」という音楽の有する特殊性が障壁となり、様々な問題が発生している。博物館の場合は、そうした背景のもと、来館者の減少という問題が起り、老朽化への対応と採算性の兼ね合いから、閉館に至るという問題が起りやすい。また、「長崎の鐘」の歌碑撤去は、歌碑としてではなく、外壁として必要の可否が判断されたという点からも、楽曲の背景や地域における楽曲の有するアイデンティティへの理解や顕彰意識

の希薄化が顕在化した事例と言える。このことから、音楽の有する次世代へ継承されにくい特殊性は、顕彰活動の継承に際し、世代間の当該音楽に対する認知度の差異に留まらず、経年による自治体等の組織としての意識の変化という視点からも障壁となっていることが窺える。

こうした事例の一方で、次世代への継承を意識した取り組みが行われている事例も存在する。例えば、静岡県浜松市出身の作詞家・清水みのるの功績を伝える施設として、浜松市立伊佐見小学校内には、「清水みのるの部屋」が開設されている。これは、一般へ向けた公開に加え、児童への母校の卒業生である清水の紹介という意味合いも有している。この展示施設は、清水没後、PTAや地元の自治会から顕彰の声が上がったのに加え、小学校でも空き教室の有効活用の一環として顕彰スペースの設置が検討されたことから、1989年に開館した(浜松市立伊佐見小学校 1989)。小学校内に流行歌に携わる音楽家の顕彰スペースを設けることで、教育現場において、次世代へ向けて音楽家の功績を継承できるという利点がある。

また、大分県竹田市では、地元出身で童謡「犬のおまわりさん」等の作品で知られる、作詞家・佐藤義美を顕彰する取り組みとして、「さとうよしみ竹田童謡祭」が例年開催されている。この童謡祭では、童謡コンサートも開催され、幼稚園児や小学生も楽しめる内容となっている。コロナ禍以前は、童謡祭の中で、射的等の「子ども縁日」、読み聞かせ、紙芝居等のほか、児童クラブによる童謡の合唱等、子どもたちが主体的に顕彰に参加できる取り組みも行われていた<sup>7)</sup>。

これらは、次世代への顕彰の継承にあたり、「郷土」や「童謡」といったキーワードが有用であることを示唆している事例である。

### (3) 顕彰活動における創造性

顕彰活動は、新たに創造することで、当該音楽家に関する興味・関心を一時的に高める効果を有している。博物館のように恒常的な展示が求められる場合は、設立が目的とはならず、新規開設後も継続的に管理・運営することで、設置者が引き続き顕彰に関わることができる。

一方で、顕彰碑は設置することが目的化する場

合が多く、設置後の管理体制の整備や先述の一時的顕彰、定期的顕彰等と組み合わせた事業展開を見据えた取り組みが、重要となる。また、設置者と設置場所の管理者が異なる場合には、長期的な設置を見据えた設置条件の確認も必要となる。

2014年に埼玉県羽生市出身の作詞家・関口義明の顕彰碑として、「道の駅はにゅう」に建立された「あ・上野駅」の歌碑は、有志11人により「関口義明先生を偲ぶ市民の会」が結成され、署名活動により建設費を集めて建立に至った経緯がある(朝日新聞社 2014)。場所が国道沿いの道の駅に位置していたため、国の設置許可を取り、スイッチを押すと楽曲が流れる仕様で設置されたが、発起人メンバーの高齢化等の理由により現在地での維持が困難となる事態となった。撤去の危機に瀕したものの、最終的に市内の上川俣天神社の境内への移転が決定した(毎日新聞社 2022)。これは、顕彰活動関与者の高齢化を背景に、設置から8年で撤去・移転へと至った事例である。恒常的顕彰にあたっては、長期的展望を踏まえた視点を持つことも必要となってくる。

一方で、阿部の指摘するような、自然発生的に聖地化され、結果的に顕彰が創造される事例もある。愛知県一宮市出身の歌手・舟木一夫の生家跡の長屋は、一般への公開を目的としたものではなかったが、地元の萩原町郷土史研究会がファンサービスを目的として案内板(写真7)を建て、ファンも多く訪れるなど、聖地化されていった(大倉 2012)。現在では取り壊されて新たにアパートが建っており、一般住民の居住空間となっているが、そのフェンスには生家跡を示す看板が掲げら

れるなど、舟木の顕彰空間となっている。

一時的顕彰は、継続的に事業を展開する性格のものではないため、恒常的顕彰、定期的顕彰と比較して、顕彰活動を創造しやすい点が特徴として挙げられる。2022年に弘前市で開催された「菊池俊輔ロビー展」は、弘前市出身の作曲家・菊池俊輔の功績を展示した展示会で、主催者の「弘前レジェンドを語り継ぐ会」が遺族からゆかりの資料を譲り受けたのを機に開催された<sup>8)</sup>。こうした取り組みは、一時的に人々の興味・関心を高める効果があるため、これを機に、継続的な顕彰活動を視野に入れた事業展開が、一方では重要となる。

以上のように、創造という観点からは、長期的・継続的な事業展開を念頭に置いた取り組みを行うことで、結果的に、地域における音楽家のアイデンティティを高めることへと繋がっていくのである。

### 3. 東海林太郎と顕彰活動

上記の音楽家顕彰活動の特性を踏まえ、次に、東海林太郎に関する従来の顕彰活動のあゆみについて紹介する。

#### (1) 東海林太郎について

東海林太郎は昭和初期から昭和40年代にかけて活躍した流行歌手である。東海林は1898年に現在の秋田県秋田市に生まれ、秋田県立秋田中学校(現・秋田県立秋田高等学校)を卒業した。秋田中学校在学中に、同校は第1回全国中等学校優勝野球大会(現在の夏の甲子園大会)で準優勝を果たしており、東海林の卒業写真には準優勝に貢献した野球部員の一部の姿も確認できる。東海林は早稲田大学を卒業後、南満州鉄道株式会社へ就職したが、歌手の夢を捨てることができず退職し、歌手デビューを果たした。歌手として「赤城の子守唄」「国境の町」「名月赤城山」等のヒット曲を残し、直立不動で歌唱する姿は東海林の代名詞となった。1965年には紫綬褒章を、1969年には勲四等旭日小綬章を、ともに歌手として初めて授与され、1972年に死去した(東海林・岩間 1984)。東海林の存命中、後援会(歌手の後援会第1号と言われている)が組織され、後援会誌も発行された。会誌の内容からは、ファンからの熱烈な支持



写真7 舟木一夫生家跡に建てられていた看板(2012年8月10日、愛知県一宮市にて筆者撮影)

西暦	顕彰内容	備考
1975年	東海林太郎顕彰碑建立	
1983年	舞台「東海林太郎物語 歌こそ我がいのち」上演	翌年も上演
1988年	「みんなで歌おう・東海林太郎」開催	生誕90年
1993年	東海林太郎顕彰碑に音楽装置設置	
1997年	東海林太郎生誕百年前年祭開催	生誕100年の前年
1998年	東海林太郎生誕百年祭開催	生誕100年
2000年	「皆で歌おう 東海林太郎」ディナーショー開催	
2002年	東海林太郎資料展示会開催	
2004年	東海林太郎音楽祭開催	三十三回忌記念
2005年	東海林太郎音楽館開館	
2006年	なつメロ・紅白歌合戦開催	東海林太郎音楽館 1 周年記念
2009年	なつメロ歌謡祭開催	生誕110周年
2012年	「東海林太郎よ 今再び」開催	没後40年・国民文化祭プレイベント
2014年	東海林太郎音楽祭開催	国民文化祭
2017年	ミュージカル「東海林太郎伝説―秋田が生んだ永遠の歌声―」上演	2020年にもアンコール上演
2021年	東海林太郎直立不動像建立	
2022年	古賀政男音楽博物館「ミュージアム講座 東海林太郎 赤城の子守唄」開催	没後50年
2022年	CD「東海林太郎 永遠の歌声」（テイチク編・コロムビア編）発売	直立不動像建立記念・没後50年
2022年	「集まり参じて100周年―東海林太郎とその学友達―」開催	早稲田大学卒業100年・没後50年
2022年	東海林太郎直立不動像建立記念歌謡祭開催	没後50年

表 1 東海林太郎没後の主な顕彰活動一覧（筆者作成）

が窺える。東海林の死去から6日後の10月10日の秋田魁新報の紙面では、30代から60代に至るまでの幅広い世代がレコード店を訪れ、東海林太郎ブームが起こりつつあることを伝えている（秋田魁新報社 1972）。そのことから、没後の人気が看取される。

東海林とほかの流行歌手とを峻別する大きな点として、起伏に富んだ歌手人生とその功績が挙げられる。大学卒業後、即歌手としてデビューを果たしたのではなく、南満州鉄道に就職し、社会人を経て歌手デビューするという紆余曲折と、ロイド眼鏡・燕尾服を着用し、直立不動で歌唱するという独特なスタイルが東海林の特徴的要素である。加えて、日本歌手協会の初代会長、歌手として初となる紫綬褒章受章等の功績も含め、それらが相俟って、後述の顕彰活動においても取り上げられやすい要素となっていると考えられる。

## （2）東海林太郎顕彰小史

東海林の顕彰は、表1の通り、没後も頻繁に実

施されている。そこで没後の主な顕彰活動について、時系列に沿って紹介する。

東海林没後、顕彰活動を主体的に行ってきた団体として、東海林太郎歌謡芸術保存会が挙げられる。同団体は、東海林の偉業を顕彰する目的で東海林の存命中の1964年に設立された。東海林の没日である1972年10月4日付で会則の一部が改定され、第一条が次の文面に改められた。

本会は、日本歌謡史上不滅の業績を遺されて、昭和47年10月4日長逝された、不世出の名人・東海林太郎先生の御偉業を顕彰し、併せて東海林太郎先生の偉大なる歌謡芸術を専門的および技術的な見地に立って永く後世に伝えるとともに、東海林太郎先生の歌謡芸術により会員相互の親睦を語り情操を昂めることをもって目的とします。（東海林・岩間 1984）

東海林が鬼籍に入ったことで後援会活動を停止せざるを得なくなったことから、この改定により、東海林の偉業の後世への継承が方針としてより強

く押し出された。なお、東海林太郎歌謡芸術保存会は2022年現在も活動を継続している。一方で、東海林太郎歌謡芸術保存会の秋田支部の会員を中心に東海林太郎顕彰会が結成され、同会は秋田県において顕彰事業を展開している<sup>(9)</sup>。

東海林没後の最初の大きな顕彰活動として、胸像の設置が挙げられる。これは、関係者やファンの中で形に残るものとして顕彰碑設立の機運が高まっていったこと（秋田魁新報社 1972b）が背景にあり、建設費を集めるべく、1974年に東海林太郎顕彰碑建設委員会が設立された。名誉会長を秋田県知事、会長を地元新聞社である秋田魁新報社社長が務め、また、事務局が秋田市教育委員会社会教育課内に置かれ、同課長が事務局長を務めるなど（東海林太郎歌謡芸術保存会 1974）、行政も建設に協力していたことが窺える。顕彰碑建設にあたっての募金活動は広がりを見せ、能代市では募金に協力すべく、東海林太郎追悼公演が開催された。これは、東海林と親交のあった能代歌謡研究会会長が、公演を開催することで募金活動に協力すべく主催したもので、1600人もの観客を集めた。市内の民謡・舞踊研究グループや在京歌手からもステージに上がり、東海林のヒット曲を歌ったとの記録が残っている（秋田魁新報社 1974b）。特に在京歌手からは「その趣旨ならぜひ自前で出演したい」（秋田魁新報社 1974a）とこの公演に賛同した声が多く寄せられた。この公演の純利益は東海林太郎顕彰碑建設委員会に贈られており、これは、恒常的顕彰にあたる顕彰碑設置という明確な目的のもと、一時的顕彰にあたるコンサートが開催されたという構図である。こうした募金協力もあり、顕彰碑は1975年5月23日、秋田県民会館の敷地の一角に完成し、除幕された。顕彰碑は、東海林の胸像と、東海林の歌唱した「母に捧ぐる歌」の歌碑から構成され、除幕式には150人が出席した。なお、当初は全身像を製作予定であったものの、予算不足から胸像となり、お披露目されたという経緯がある（秋田魁新報社 1975）。

この顕彰碑をめぐっては、除幕から18年後の1993年5月23日に、近付くと東海林の歌唱曲6曲が流れる音楽装置が設置された。これは、前年8月から募金活動を行い、集まった約300万円で

建てられたものである。人の気配をセンサーが感知して自動的に楽曲が流れるものであった（毎日新聞社 1993）。メロディの演奏は、視覚のみならず聴覚を利用して顕彰の一端に触れるという、音楽家の顕彰碑特有の仕掛けである（写真8）。

次の顕彰活動として、1983年の新橋演舞場での舞台「東海林太郎物語 歌こそ我がいのち」が挙げられる。これは、藤田まことが主演の東海林役を務めた一代記で、劇中、藤田がフルバンドで東海林の代表曲を歌唱する場面も見られた（読売新聞社 1983b）。当時の紙面からは、藤田の演技が「顔もそっくり、歌もそっくり」（読売新聞社 1983a）と反響を呼んでいた様子が窺える。同舞台は翌年も再演（朝日新聞社 1984）され、その際に藤田は、第39回文化庁芸術祭優秀賞を受賞している<sup>(10)</sup>。東海林の死去から10年が経過し、東海林のことをリアルタイムで知る世代が多い中、東海林とも親交のあった藤田が演じ、更には東海林のヒット曲を歌唱したことで、観劇者にとっては懐古の意味合いの強いものであったと考えられる。なお、藤田は、1980年放送のテレビドラマ「熱唱！ 藤田まこと 男涙の子守唄〜34歳の新人歌手」でも東海林を演じた経験があったことを補記する。

次に挙げられるのが、1998年の東海林太郎生誕100年に合わせて展開された様々な顕彰事業である。周年事業として東海林太郎生誕百年祭実行委員会が組織され、前年の1997年12月5日には前年祭<sup>(11)</sup>も開催（朝日新聞社 1997）された。

1998年には、まず、7月30日に「東海林太郎そっ



写真8 秋田県民会館の一角にあった東海林太郎顕彰碑（2012年9月12日、秋田県秋田市にて筆者撮影）

くりさん大賞」が開催された。書類審査を通過した9名による歌唱が行われ、グランプリ1名が決定した。「えんぴ服姿の「そっくりさん」たちが直立不動の姿勢で、少し顔を上げ気味に、「国境の町」や「赤城の子守唄」、「名月赤城山」などの代表曲を次々と披露すると、会場からは大きな拍手が送られた」(毎日新聞社 1998a) との記録が残っている。

また、東海林の命日である10月4日には「東海林太郎生誕百年祭 永遠のメロディー みんなで歌おう東海林太郎」が開催された。これは東海林の生誕100年を記念したイベントであり、東海林の楽曲の歌唱者を募集し、応募者が舞台で東海林の楽曲を歌唱し、東海林の歌の素晴らしさを広める目的のもと開催された。冒頭、東海林の母校である秋田市立保戸野小学校の児童らによる合唱も行われており、教育現場と連携した顕彰の取り組みが確認できる。イベント後には、秋田市立中央図書館明德館の敷地内へ、かつて東海林の生家にあったケヤキの木の記念植樹、石灯籠(写真9)への飾り付けが行われるなど、多くの内容を盛り込んだ音楽祭となった(朝日新聞社 1998b)。

また、同年の東海林の誕生日である12月11日には「東海林太郎生誕百年記念 東海林太郎音楽祭」が開催された。このイベントの第一部では「東海林太郎 永遠のメロディ」と題した作曲家・三枝成彰のトークショーが、第二部では東海林ゆかりの歌手による歌謡ショー<sup>(12)</sup>が行われ、東海林を偲ぶ内容となった(毎日新聞社 1998c)。第一部、第二部でトークショーと歌謡ショーを組み合わせ



写真9 東海林太郎生家にあった石灯籠とケヤキ(2017年12月10日、秋田県秋田市にて筆者撮影)

たことで、参加者は楽しみながら東海林の功績を振り返ることができる構成となっていた。

このほかにも、東海林の生誕100年に合わせて、秋田県立博物館では東海林のステージ衣装、靴、小学生時代の絵(朝日新聞社 1998a)等を展示した企画展「東海林太郎—歌の生涯—」が開催された。開催のための調査研究では、同博物館内の秋田の先覚記念室で顕彰している東海林と和田喜八郎が義理の兄弟であったことが明らかになっており(秋田県立博物館 1998)、生誕100年の周年行事を契機に、学術面においても新事実の発見があった。また、ビール会社では東海林の名を冠したビールが限定販売される(毎日新聞社 1998b)など、秋田県全域にこの動きは波及しており、生誕100年という節目を契機に、各所で多様な顕彰が展開されていたことが看取される。

こうした東海林顕彰の動きは、その後も断続的に見られる。2002年には、8月3日、4日、6日の3日間、東海林太郎顕彰会主催により、秋田市立中央図書館明德館内のホールで「東海林太郎資料展示会」が開催された。この展示会では、東海林直筆の資料や胸像原型、レコード、写真等が展示され、館内では東海林のCD・レコードが再生された(東海林太郎顕彰会 2002)。常設の展示施設である東海林太郎音楽館が開設される以前であったため、東海林の一次資料を目にすることのできる貴重な機会であったと考えられる。秋田市立中央図書館明德館には、敷地内に先述の東海林の生家に設置されていた石灯籠とケヤキの木が設置、植樹されており、東海林との関係性の深い施設である。そのため、より東海林と郷土の結び付きを実感させる効果があったと考えられる。

2004年には、市内のホテルで東海林の三十三回忌の前日にあたる10月3日に音楽祭が開催された。これは、東海林太郎顕彰会が中心となり、東海林太郎音楽祭実行委員会を組織し開催したもので、作詞家・東海林良が思い出を語る講演会、「東海林太郎を唄う」と題して市民が東海林のヒット曲を歌唱する歌謡祭、レコードジャケットやポスター等を展示する展覧会から構成された(朝日新聞社 2004a)。歌謡祭には地元小学校の合唱部も参加(朝日新聞社 2004b)しており、地域の小学生へ向けた継承も意識された取り組みであった。



写真 10 東海林太郎音楽館の展示風景（2014 年 7 月 27 日、秋田県秋田市にて筆者撮影）

こうした顕彰活動が契機となり、2005 年には秋田市内に東海林太郎音楽館（写真 10）が開館した。東海林太郎顕彰会による運営で、前年の音楽祭後、有志が展示品を収集してきた背景がある（朝日新聞社 2005a）。音楽館はその後後述のように資料が拡充され、現在に至っている。また、同年には音楽館開館記念として、燕尾服を着て東海林に扮した男性約 40 人が東海林の楽曲を熱唱する催しが秋田県民会館において開催された（朝日新聞社 2005b）。このイベントは本来 100 人を集める予定だったが集まらず、没後 33 年が経過し、東海林の功績を継承する難しさが表面化した催しでもあった。

更に 2012 年には、東海林の没後 40 年を記念したイベント「東海林太郎 今再び」が秋田市内の商業施設で開催された。これは、次に述べる 2014 年の国民文化祭のプレイベントとして企画されたものである。国民文化祭へ向けて秋田県等から関連企画開催を打診された東海林太郎顕彰会が、「県民に偉業を伝えるため、市民が参加するイベント」（読売新聞社 2012）として、そっくりさんによる歌謡ショー、参加者との合唱等から構成した。開催に際し、顕彰会は「『歌うことが我が命』と国民のために歌うことを使命とした東海林太郎の生き様を歌い継ぎ、語り継ぐのが我々の責務」（読売新聞社 2012）と表明しており、次世代へ東海林の功績を伝えることを使命としていたことが窺える。

こうしたプレイベントを踏まえ、2014 年に「東海林太郎音楽祭」が開催された。これは、「第 29

回国民文化祭・あきた 2014」の事業として、東海林の命日に合わせ 10 月 4 日、5 日に開催された催しである。この行事ではまず、4 日に「東海林太郎〈歌の供養祭〉」と題した演奏会と東海林の生涯を描いた物語の朗読が行われ、5 日に「人間東海林太郎を語る」と題したシンポジウム、東海林の楽曲を応募団体が歌唱する「みんなで歌おう東海林太郎」、東海林ゆかりの歌手による歌謡ショー等が開かれた（第 29 回国民文化祭秋田市実行委員会 2014）。この行事は、多様な内容から構成され、幅広い視座から東海林について知ることができるという特徴がある。また、母校の秋田市立保戸野小学校の児童、秋田県立秋田高等学校の生徒も合唱に加わるなど、世代を超えて東海林に思いを馳せ、その功績を顕彰する内容となった（第 29 回国民文化祭秋田市実行委員会事務局 2015）。この行事は国民文化祭の一環として開催されたものであり、自治体が運営に携わったことで、郷土の歌手として、幅広い観点から東海林の功績を伝える企画が実現できたと推察される。

更に、2017 年 11 月 5 日～2018 年 2 月 18 日には、秋田市内で東海林の生涯を描いたミュージカル「東海林太郎伝説—秋田が生んだ永遠の歌声—」が上演された。これは、秋田県、秋田市、秋田県教育委員会、秋田市教育委員会、秋田魁新報社、東海林太郎顕彰会、秋田商工会議所により、ミュージカル「東海林太郎伝説」公演実行委員会が構成され、県内に拠点を置く劇団わらび座のプロデュースにより開催に至ったものである<sup>(13)</sup>。秋田市では、官民連携により、中心街の活性化を目的としたゆかりの人物を描いたミュージカルのロングラン公演が毎年開催されており、その一環として東海林が題材に選ばれた経緯があった（朝日新聞社 2017）。東海林の起伏に富んだ歌手人生が描かれており、東海林を直接知らない世代にとっても、人柄を知りその功績に触れる機会となった。実際に、このミュージカルには県内の小中学生が無料招待されており、演劇を通じ先人の功績を学習するという新たな顕彰形態を示したものであった。それが、懐古の意味合いの強かった、1983 年の舞台「東海林太郎物語 歌こそ我がいのち」とは大きく異なる点である。このミュージカルは、2020 年 1 月 25 日～3 月 1 日の期間、秋田県

大仙市のあきた芸術村小劇場でアンコール上演<sup>(14)</sup>されるなど、話題を呼んだ。

ここに挙げた以外にも、1988年の生誕90年、2009年の生誕110年を記念したイベント等、一時的顕彰に該当する企画が頻繁に開催されており、一過性のものに終わらずに継続的に顕彰を意識していることが窺える。こうした顕彰事業展開に際して大きな役割を果たしているのが、顕彰団体（東海林太郎歌謡芸術保存会、東海林太郎顕彰会等）である。東海林没後も半世紀近くにわたり顕彰活動が実施されていることを鑑みると、団体内での継承・引継、行政等との連携の円滑化により、今日に至るまで、顕彰活動を継続できていると考えられる。「生誕X年」「没後X年」のような周年行事として顕彰事業を開催することで、開催目的を明確化でき、顕彰の意義を周知しやすい環境が整えられていると言えるだろう。

一方で、かつては東海林太郎顕彰碑建設委員会の事務局が行政内に設置されるなど、当初は行政が主体となっていたものが、行政の手を離れ、顕彰団体を中心に活動が推進されるようになった経緯が窺える。しかし、断続的に顕彰事業を創造してきた積み重ねがあったことで、国民文化祭での行政側からの関連事業開催の打診や、ミュージカル開催時の実行委員会構成等、行政との連携がより容易にできるようになったと言えるだろう。その中でも、東海林のことを直接知る世代が少なくなるに従って、従来の懐古の側面の強い顕彰から、東海林の母校の児童・生徒の合唱参加やミュージカル上演など、これまでとは異なる形を「創造」し、より次世代への「継承」を意識した顕彰へと変化するなど、時代に合わせた取り組みが模索されている。

### （3）東海林太郎音楽館における展示資料の拡充

恒常的顕彰に分類される博物館では、展示の更新や企画展の開催等、新たな話題を提供することで、音楽家の功績の埋没化を防ぎ、人々の興味・関心を維持することができる。東海林太郎音楽館では、開館後も新たな資料を展示し、それがメディアに取り上げられるなど、話題を呼んでいる。そこで開館後展示に加えた資料のうち、特徴的な4例を紹介する。

1例目は、2006年から展示に加えられた、東海林が最後の舞台上で着用した衣装である。これは、東海林太郎歌謡芸術保存会旧蔵の衣装であり、東海林の歌唱スタイルに合わせて、直立したマネキンに着せて展示された（毎日新聞社 2006）。東海林の歌唱時のトレードマークともいえる、燕尾服を直立不動のマネキンに着せるという展示方法を取ることで、再現性が高まり、東海林に対する理解をより促す効果がある。

2例目は、2014年に寄贈されたゆかりのピアノである。これは、東海林の発声練習時に、最初の妻が伴奏に使用したものである。2014年当時の所有者から同館に寄贈され、来館者が自由に演奏できるよう整備された（毎日新聞社 2014a）。楽器はほかの資料とは異なり、音を奏でることで聴覚に訴える展示が可能となるという特殊性を有している。その特性を活かし、自由に演奏できる参加型展示の空間を設けることで、より音楽家を身近に感じることができるという効果をもたらしている。

3例目は、2014年に寄贈された、東海林のプロ入りのきっかけとなった1933年の「第2回時事新報社主催音楽コンクール」の入賞を讃えるはがきである。このはがきは、入賞者を対象とした夕食会への出席を東海林に勧める内容（毎日新聞社 2014b）であるため、東海林の歌手人生を俯瞰するにあたっても、転換点として大きな意味を有する資料である。

4例目は、2018年に寄贈された、戦時中に東海林が出征する男性へ贈った日章旗である。親交のあった男性に召集令状が届いたことを知った東海林が贈ったもので、東海林直筆の文字や歌詞が刻まれている。これは日章旗の存在を知った館側が寄贈を申し入れた経緯がある（朝日新聞社 2018）。戦時中という時代背景と音楽家との接点を示す資料として価値を有している。

4例いずれも、紙面に記事が掲載されており、メディアに取り上げられることで、一定の話題性を呼び込む効果を得られた。また、2・3例目は秋田県で国民文化祭が開催された2014年に、4例目は東海林の生誕120周年にあたる2018年に寄贈を受けており、そうした行事と関連付けることで、より一層注目を集める結果となった。

#### 4. 東海林太郎直立不動像建立と関連事業

2021年には直立不動像が建立、2022年にはその関連事業が開催されるなど、没後半世紀近くが経過してもなお、東海林の顕彰事業は頻繁に展開されている。直立不動像は恒常的顕彰、関連事業は一時的顕彰に該当することから、それらの事業の特性を鑑み、背景・内容について明らかにする。

##### (1) 東海林太郎直立不動像の建立

東海林太郎顕彰碑は、秋田県民会館の一角に設置されていたが、2018年から始まった秋田県民会館の建て替え工事に伴い、撤去された。そこで、秋田県民会館の向かいに位置し、2021年3月開業の秋田市文化創造館の敷地内に新たに、東海林太郎直立不動像を建立すべく、計画が進められた。直立不動像建立は、1975年の胸像設置の際に、当初は全身像建立を計画するも財政難により胸像となったという経緯を踏まえ、「代名詞の「直立不動」で歌う姿を形に残したい」（読売新聞社2021）と立ち上がった有志により、募金計画が持ち上がった。東海林太郎顕彰会が中心となり「東海林太郎直立不動像建立委員会」を立ち上げ（朝日新聞社2020）、以下の主旨、目標金額等が掲げられた<sup>(15)</sup>。

##### ・主旨

2020年秋に完成予定の新秋田県民会館付



写真 11 東海林太郎直立不動像（2021年3月28日、秋田県秋田市にて筆者撮影）

近に移転予定の東海林太郎胸像を宮本武蔵の「一刀護民」から学び「一唱民楽」を主唱され、努力、礼節、友愛を重んじ歌一途の国民的歌手東海林太郎の「歌と人間性」を広く後世に伝承するため、全国からご支援を受け旧県立美術館横に直立不動像として建立する。

・目標金額 800万円

・募集期間 2019年8月～2021年2月頃

・募金額 個人1口1000円

法人1口10000円

その結果、119法人、個人687名から募金が集まり、直立不動像建立へと至った。東海林の歌唱時の直立不動のスタイルをモチーフとし、ロイド眼鏡、燕尾服を着用させるなど、再現性の高い立像となっている（写真11）。そのため、東海林を直接的に知る世代にとっても、知らない世代にとっても、歌手像をイメージしやすいという効果がある。直立不動像の脇には、胸像とともに秋田県民会館の一角にあった、「母に捧ぐる歌」の歌碑と音楽装置が設置され、以前のように、聴覚に訴える顕彰も行われるようになった。更に、「母に捧ぐる歌」の歌碑の裏面には、119法人、個人687名の募金者の名前を刻んだ銘板が設置された。

2021年3月27日に行われた除幕式には、東海林太郎直立不動像建立委員会・呼び掛け人代表を務め、東海林とも親交のあったコーラスグループ・ボニージャックスのリーダー・西脇久夫ら約40人が出席した。最初に寄付した92歳の男性、寄付者最年少の8歳の女兒らが除幕（毎日新聞社2021）したことからも、世代を問わず顕彰への関与があった事実が看取される。2022年には、音楽装置からの歌声をじっくり聴くためのベンチも設置され、一角は憩いの場として機能している。建立後は、直立不動像の保存と管理を目的とした東海林太郎直立不動像保存会<sup>(16)</sup>が組織され、継続的に保存・管理にかかる対応を行っている<sup>(17)</sup>。

新たな顕彰碑の創造は、その後の埋没化を防ぐための継続的な取り組みを見据えることが肝要であるが、本事例は、東海林太郎直立不動像が最終目標とならず、建立を契機として、保存会の結成や後述の東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭等の事業を展開することで、その後の継承を見据え

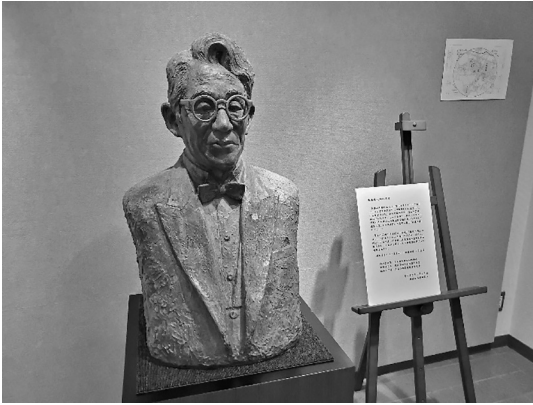


写真12 東海林太郎の胸像(2022年10月22日、ワセダギャラリーにて筆者撮影)

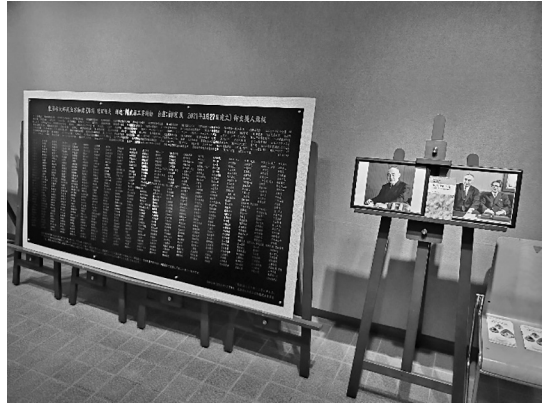


写真14 東海林太郎直立不動像の支援者銘板(左)と瀬尾俊三に関する展示(右)(2022年10月22日、ワセダギャラリーにて筆者撮影)



写真13 浅沼稻次郎(左)と河野謙三(右)の展示(2022年10月22日、ワセダギャラリーにて筆者撮影)

た活動がなされており、その点が、東海林太郎直立不動像にかかる顕彰の特徴である。

## (2) 展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」の開催

2022年は、東海林の没後50年であるとともに、早稲田大学卒業100年となる節目の年でもあった。そこで、稲門会と呼ばれる各地の同大学の卒業生の団体が中心となり、記念イベントとして展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」が計画された。このイベントは、「東海林太郎とその学友達の生涯を辿り、早稲田人魂を蘇らせて新たな交流を図る」ことを目的に掲げており、学内のワセダギャラリーにおいて、10

月22日～23日の2日間開催された。秋田県内の稲門会のメンバーを中心に招待状を発送するなど、周知にも努め実施に至った。

館内では、かつて秋田県民会館の一角に設置されていた胸像、東海林太郎直立不動像の支援者銘板(複製)、東海林の在学当時の写真等、東海林に関する資料が展示されるとともに、同時代に同大学に在学していた学友に関するパネルや関係資料も紹介されるなど、東海林が学生生活を送った1920年代の様子を窺える内容となった。学友としては、瀬尾俊三(雪印乳業社長)、河野謙三(政治家)、浅沼稻次郎(政治家)、井伏鱒二(小説家)、池田豊(野球関係者)等が紹介され、幅広い分野で活躍した代表的な著名人が取り上げられた。この展示では、胸像や銘板のようなこれまでの顕彰活動の軌跡を追える資料が展示されたことで、現在に至るまでなお親しまれている東海林の人柄について知ることができる。そればかりではなく、同時代の学友について触れることで、100年前の早稲田大学の学生生活に思いを馳せることのできる試みであった(写真12、写真13、写真14)。

会期2日目の10月23日は、早稲田大学のホームcomingデーにあたり、また、校友会最大のイベントでもある稲門祭も開催されたため、早稲田大学関係者に向けた東海林や学友に関する功績の発信という意味合いが強いものの、卒業生の組織である稲門会を中心に、顕彰の意識が高まり、開催に至った点は特筆すべきである。これは大学が

直接的に関与した展示会ではないが、卒業生を中心とした学校関係者の間で、卒業100年という周年を節目に、顕彰の機運が高まっていったという事実は、リアルタイムで東海林のことを知る人々が少なくなる中において、「同窓生」という観点の重要性を認識させられる事例であり、今後の顕彰の在り方を示唆するものと言えるだろう。

### (3) 東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」の開催

東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」は、2021年の東海林太郎直立不動像完成を記念して、2022年11月4日に、秋田市のあきた芸術劇場ミルハス中ホールにおいて開催された音楽イベントである（写真15）。なお、あきた芸術劇場ミルハスは、秋田県民会館が建て替えられ、新たに開館した施設である。このイベントは6つのコーナーに分けられたため、それぞれの内容について紹介する。

第1部では、秋田県を中心に活動するピアニスト・前田英樹によるクラシック楽曲の演奏が行われた。3曲が演奏され、うち1曲はシューベルトの楽曲であったが、これは東海林が「白寿のリサイタルではシューベルトを歌いたい」と口にしていたことに因んでの選曲であった。

第2部では、生前の東海林と親交のあった作曲家・山本寛之が登場し、自身の代表曲である「野風増」等を歌唱した。

第3部は、「東海林太郎の人と歌—そしてこれから」と題し、嘶家・林家たけ平、日本大学教授・刑部芳則、筆者による鼎談が行われ、東海林の魅力や後世に功績を伝えるための将来的展望等が話題に上がった。

第4部では、秋田県出身の歌手・岩本公水が登場し、次に登場する田中唯介作曲の「夢凍る・シベリヤの友よ」をはじめ代表曲やカバー曲を歌唱した。岩本は、1998年の「東海林太郎生誕百年記念 東海林太郎音楽祭」の歌謡ショーでも歌唱しており、同郷の秋田県出身の歌手としての出演であった。

第5部では、作曲家・田中唯介による歌唱が行われた。田中はシベリア抑留の経験があり、抑留生活や戦地での経験をもとにした「夢凍る・シベ

リヤの友よ」を自主制作した。田中は、家族が東海林の家族と親交があったことから、東海林を通じて歌手・藤山一郎の紹介を受け、アコーディオンの指導を受けた経緯がある<sup>(18)</sup>。現在でもアコーディオン奏者として活動しており、自身が作曲した「夢凍る・シベリヤの友よ」や東海林の楽曲等をアコーディオンの弾き語りで披露した。

そして第6部では、コーラスグループ・ボニージャックスが登場し、自身のヒット曲等を披露した。今回のステージは、2021年の東海林太郎直立不動像の除幕式に出席し、同年に急逝したリーダー・西脇久夫を偲んで、「一亡き西脇久夫リーダーを偲ぶ」と題して行われた。ボニージャックスは東海林の早稲田大学の後輩にあたり、東海林の生前最後のテレビ出演となった東京12チャンネル「なつかしの歌声」でも共演している。また、2014年の「東海林太郎音楽祭」にも出演するなど、東海林とゆかりの深いグループであると言える。東海林と最後の共演となった「なつかしの歌声」でともに歌った「早稲田大学校歌」を披

東海林太郎直立不動像  
建立記念音楽祭

つなごう  
東海林太郎の人と歌

と き 令和4年11月4日(金) 開場11:30 開演12:00  
と ころ あきた芸術劇場 中ホール 秋田市千秋町2-52  
入場券 一般 5,000円・ペア 8,000円(全席自由席)

出演

前田英樹 (ピアニスト)  
● シューベルト (協奏曲第3番)  
● ショパン (ノクターン第4番)  
● ディブシー (月の光)

山本寛之 (作曲・電子)  
● 野風増 ● 友情酒  
● 兄弟 (あしあと) ● 祭ばやし  
友誼出演 東海林典 (作詞家)

鼎談 「東海林太郎の人と歌—そしてこれから」  
林家たけ平 (作家)  
刑部芳則 (日本大学教授)  
井上裕太 (弘前学院大学講師)

岩本公水 (歌手) 田中唯介 (作曲家) 「シベリアを歌う」  
● 夢凍る・シベリアの友よ ● まぶたの縁側、花嫁よ  
● 雨にぬれても ● 北方赤城山  
● 星の海、北の空 ● バイカル湖のほとり  
● 夢の国 ● 哀愁の丘  
● まぶたの縁側、舞踏 ● さらばアホカ  
● なきり母国 ● 哀愁の丘  
● しぐれ ● 国境の町  
● 涙戦はいいね! ● 夢凍る・シベリアの友よ

ボニージャックス 一亡き西脇久夫リーダーを偲ぶ  
(玉田元康 鹿島武臣 吉田秀行)  
● 雨にぬれても ● 水鏡 (もめん)  
● ルイジアナママ ● 空とぶうさぎ  
● 星の海 ● 星の海  
● 夢の国 ● 夢の国  
● 夢の国 ● 夢の国  
● 夢の国 ● 夢の国

主 催 秋田県立総合文化センター 秋田県立総合文化センター 秋田県立総合文化センター  
TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111 TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111  
TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111 TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111  
TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111 TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111  
TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111 TEL 019-651-1111 FAX 019-651-1111

写真15 東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」ポスター

露するなど、東海林との思い出も踏まえたステージとなった。

音楽祭の最後には、出演者がステージに上がり、東海林の代表曲である「国境の町」を合唱して幕を閉じた。

音楽祭全体の構成を俯瞰すると、東海林とゆかりのある歌手、同郷の歌手が登場することで、東海林の出身地である秋田から、東海林の功績を発信する意図を見出すことができる。また、この音楽祭が、前年に完成した東海林太郎直立不動像建立記念と銘打たれたことから、恒常的顕彰である直立不動像の存在価値を内外にアピールする場として、一時的顕彰であるこの音楽祭が機能したと言える。実際、本イベントには東海林のファンのみならず、出演歌手の関係者やファンも含め、約700名が来場した。そうしたことから、東海林のことを日常的に接する機会の少ない来場者へ東海林の功績を伝えることができた点に、本イベントを実施した意義があったと言える。

過去の同様の音楽祭と比較すると、トークショーと歌謡ショーの2部構成で実施された1998年の「東海林太郎生誕百年記念 東海林太郎音楽祭」、シンポジウムと歌謡ショーが組み合わされた2014年の「東海林太郎音楽祭」と同様に、今回の構成は東海林について語る第3部の鼎談と、それ以外の歌唱・演奏のコーナーの大きく2つに分けられる。歌謡ショーのみならず、東海林の人物像や楽曲について知る機会が設けられたことで、音楽祭は、東海林のファンのみならず、出演者の関係者やファンに、東海林の功績を認知してもらう大きな契機として機能したと言える。そうした意味において、過去の音楽祭におけるトークショーやシンポジウムと同様に、東海林に関する話題を提供する場が設けられた点、東海林の楽曲のみを取り上げるのではなく、出演者が自身の楽曲を披露しつつ、東海林を顕彰する場として音楽祭を実施した点は、顕彰対象について直接知らない世代も多くなってきた中で、顕彰を行う上での1つの実践モデルとなったと言える。

## 5. 結論

2022年は、東海林の没後50年を記念して、このほかにも、数多くの顕彰活動が行われた。例え

ば、CD「東海林太郎 永遠のアルバム」の発売<sup>(19)</sup>、古賀政男音楽博物館における「ミュージアム講座 東海林太郎 赤城の子守唄」の開催<sup>(20)</sup>、BSテレ東「武田鉄矢の昭和は輝いていたスペシャル【東海林太郎・没後50年波瀾万丈SP】」<sup>(21)</sup>の放送等である。没後50年が経過し、東海林のことを知る人が次第に少なくなる中においても、多くの顕彰活動が行われたことは、東海林の功績の大きさを示す証左と言えよう。ポピュラー音楽家で、没後半世紀が経過してもなお、顕彰活動が盛んな事例は稀有であるが故に、顕彰活動の継承、創造という観点からも多くの示唆に富んでいる。

まず、「継承」には、顕彰活動の運営者、参加者の2つの視点が挙げられる。

運営者の視点からは、高齢化や後継者不足等が課題に上がる。その意味においては、東海林太郎直立不動像建立後に、保存会を組織し、個人ではなく組織として管理を担っている点は特筆すべきである。それにより、組織として継続的視野から立像保存のための対応が可能となる。また、展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」において、東海林の愛好家のみならず、学校の卒業生を中心に運営チームが組織された点も、今後の継続的な顕彰を見据える上で重要な事例と言えよう。ポピュラー音楽家の往時を知る人々が減少していく中で、愛好家のみで顕彰事業を展開することは容易ではないという事実は自明である。そこで、母校の先人の顕彰という観点から、卒業生が事業を企画するという視点は、顕彰活動の継承という意味においても肝要である。

参加者の視点から音楽家の顕彰活動の課題を紐解くと、根本的原因として、新規参加者の減少が挙げられる。そこで、「清水みのるの部屋」や「さとうよしみ竹田童謡祭」の事例のような、子どもたちへ直接的に継承を働きかけるという手法は勿論であるが、それ以外にも、同窓、同郷のような自身と顕彰者との何らかの縁故や、顕彰者への共感等をきっかけとして、顕彰活動への参加を促す取り組みが考えられる。その意味においては、東海林太郎直立不動像建立委員会が秋田県内を中心に募金を呼びかけ、その結果、東海林のことを知らない世代も含めて多くの募金が集まった事実は、顕彰活動に関して、何らかの接点を感じた

人々、理念に共鳴した人々が行動を起こしたことの証左と言える。また、展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」のように同窓生が母校の先人として顕彰者に触れられる仕組みや、東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」のように、ゲスト出演者のファンらに、イベント参加を契機に顕彰者に興味を持ってもらう取り組み等、参加度の濃淡を問わず、様々なきっかけから、認知度を高め、顕彰活動への参加の輪を広げていくことが、今後のポピュラー音楽家の顕彰活動において求められる。

一方、「創造」の観点からは、長期的視野に立った計画がより重要となる。東海林太郎直立不動像は秋田市文化創造館の敷地内にあり、向かいには2022年に開館したあきた芸術劇場ミルハスや秋田市立中央図書館明徳館が位置している。更には、秋田市指定名勝である千秋公園（久保田城跡）の入口付近に立地しているため、立像はそれらへ向かう人々の視界に入りやすい環境にある。そのため、東海林のことを知らない人々へも恒常的かつ効率的に立像の存在を周知させる効果を有している。立像の隣には「母に捧ぐる歌」の歌碑と音楽装置が設置されていることから、東海林の歌声に触れる機会も創り出されている。しかし、顕彰碑は作ることを目的とせず、一時的顕彰と組み合わせた継続的な周知活動が重要であることは先述の通りであり、本稿において取り上げた事例は、没後50年と絡め、展示会「集まり参じて100周年—東海林太郎とその学友達—」や東海林太郎直立不動像建立記念音楽祭「つなごう東海林太郎の人と歌」をはじめとした関連事業の開催を起爆剤として、より東海林の周知に注力したものである。東海林に関する顕彰活動は表1の通り頻繁に行われているため、今後も断続的に一時的顕彰を行うことで、更に東海林の認知度を高め、次世代へ繋げていくことが可能となる。

そして何より、恒常的に東海林の功績を紹介する施設として、今後も東海林太郎音楽館が機能し続けることが重要である。常設的な展示のみならず、展示資料の入れ替えや拡充を行うことで、展示を陳腐化させることなく東海林の魅力を発信し続けることが可能となる。

音楽家の顕彰活動を継続していくためには、次世代への継承、新規事業の創造を常に見据えた活動を行うことが重要であるという点が、東海林太郎直立不動像の建立と関連事業からは見えてくるのである。

## おわりに

秋田県では、音楽を含め大衆芸能が幅広く受容されてきた特有の歴史があり、そうした観点から俯瞰的に郷土史がまとめられたことはあった（佐藤 1976）が、ポピュラー音楽家の顕彰という観点は、これまで議論の俎上に載ることはなかったため、本稿では新たな視点を考察した。

東海林太郎の顕彰活動は、東海林太郎音楽館における資料公開、拡充のほか、2021年に新たに直立不動像が建立され、2022年には同像建立と没後50年を記念した関連行事が開催されるなど、活発に行われている稀有な事例である。今後は、没後50年が経過してもなお活動を継続している、東海林太郎歌謡芸術保存会及び東海林太郎顕彰会のこれまでの活動内容について、文献等を渉猟し、顕彰史の詳細を明示することを目標とする。それにより、東海林太郎にかかる顕彰実態を体系的に解明でき、将来にわたり持続可能な顕彰モデルとして具体的に示すことが可能となる。また、あわせて、ほかの音楽家に関する顕彰実態についても調査することで、持続可能な顕彰活動の在り方をより多くの視座から検討できるだろう。

特に北東北3県は、2022年時点で筆者の把握する国内の音楽家個人を顕彰する博物館全58館のうち、8館（黒石市ゆかりの作曲家私設資料館、Y. C. M 吉幾三コレクションミュージアム、三沢市寺山修司記念館<sup>(22)</sup>、サトウハチロー記念館、野村胡堂・あらえびす記念館<sup>(23)</sup>、宮古市新里生涯学習センター鳥取春陽展示ホール、浜辺の歌音楽館、東海林太郎音楽館）が集中するなど、音楽家の顕彰活動が全国的に見ても盛んに行われている地域と言える。そうした文化的背景をも分析することで、より具体的な顕彰活動の本質を明らかにできるはずである。

## 註

- (1) 例えば音楽博物館の新規開館数は、1960-70年代は2館のみであったが、1980年代、90年代、2000年代には、それぞれ順に7館、16館、11館と増加する傾向にある(山田 2013)。これは、1988年のふるさと創生事業開始以降、地域振興の核として音楽が注目されるようになったことが一因として挙げられる。
- (2) 阿部は、明確な意図のもと整備される生家や博物館と対極にある、自然発生的に聖地化された事例として、ジョン・レノンの住居であったダコタ・ハウスを挙げている。ここは、現在でも一般の人々が生活しており公開されてはいないものの、観光スポットとして聖地化されているという実態がある(阿部 2021)。
- (3) 福島 古閑裕而、没後30年でコンサート  
朝日新聞デジタル (2022年11月1日閲覧)  
<https://www.asahi.com/articles/ASM8L2HNWM8LUGTB001.html>
- (4) 函館のサブちゃん記念館が休館 設備点検し再開めざす 朝日新聞デジタル  
(2022年11月1日閲覧)  
<https://www.asahi.com/articles/ASP965FPGP96IPE002.html>
- (5) 「長崎の鐘」楽譜彫られた外壁撤去 天主公園 長崎新聞 (2022年11月1日閲覧)  
<https://nordot.app/665395129104614497?c=174761113988793844>
- (6) 長崎市へのご意見・ご提案等の紹介 【「長崎の鐘」の歌碑について】  
長崎市 (2022年11月1日閲覧)  
[http://www.city.nagasaki.lg.jp/n\\_city/iken/detail.php?id=3587](http://www.city.nagasaki.lg.jp/n_city/iken/detail.php?id=3587)
- (7) 第31回さとうよしみ竹田童謡祭  
(2022年11月1日閲覧)  
<http://syounoita-ed.jp/taketa/toyooka/files/41d96b5a850ff6f8fc4c3aa2bbde8b.pdf>
- (8) 弘前で「菊池俊輔展」「ドラえもん」「ドラゴンボール」アニメの作曲家  
弘前経済新聞 (2022年11月1日閲覧)  
<https://hirosaki.keizai.biz/headline/1972/>
- (9) NPO 法人ポータルサイト 東海林太郎顕彰会  
内閣府 NPO ホームページ  
(2022年11月1日閲覧)  
<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/005000119>
- (10) 文化庁芸術祭賞受賞一覧  
文化庁 (2022年11月1日閲覧)  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsusai/jusho\\_ichiran.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsusai/jusho_ichiran.html)
- (11) 前年祭には田端義夫、島倉千代子が出演し、歌唱のほか、東海林との思い出を披露した(毎日新聞 1997)。
- (12) 歌謡ショーでは、ベギー葉山による代表曲の歌唱のほか、東海林ゆかりの田端義夫、秋田県出身の岩本公水による生誕100周年記念曲の歌唱が行われた。そのほか、東海林の肖像画の秋田市への寄贈も行われており、この肖像画は現在、東海林太郎音楽館に飾られている(毎日新聞社 1998c)。
- (13) ミュージカル東海林太郎伝説 | 劇団わらび座  
(2022年11月1日閲覧)  
<https://www.warabi.jp/syozitaro/>
- (14) わらび座ミュージカル「東海林太郎伝説」 | 劇団わらび座 (2022年11月1日閲覧)  
<https://www.warabi.jp/shojitaro2019/>
- (15) 東海林太郎直立不動像保存会  
(2022年11月1日閲覧)  
<http://www.donpu.net/chokuritsufudo/>
- (16) 東海林太郎直立不動像保存会規約  
(2022年11月1日閲覧)  
[http://www.donpu.net/chokuritsufudo/hozonkai\\_kiyaku.pdf](http://www.donpu.net/chokuritsufudo/hozonkai_kiyaku.pdf)
- (17) 具体的には、東海林太郎直立不動像を設置した土地の賃貸料等を秋田市へ支払っており、支払いは東海林太郎顕彰会名義で行っている。
- (18) 「東海林太郎に聞かせたい」 兵庫のアコーディオン奏者がCD 秋田魁新報電子版  
(2022年11月1日閲覧)  
<https://www.sakigake.jp/news/article/20220221AK0017/>
- (19) 東海林の没後50周年を迎え、直立不動像が建立されたことを記念して、刑部芳則監修により発売された。テイチク編、コロムビア編から成り、ステレオ再録音による音源を中心に、初CD化音源や東海林太郎名義以外で録音された音源も収録されている。
- (20) 東海林の魅力に迫るミュージアム講座として、2022年9月25日に開催された。講師の林家たけ平の解説により、東海林の人生を振り返る内容で、歌手・三丘翔太、東海林太郎音楽館長・佐々木三知夫もゲスト出演した。
- (21) 東海林の没後50周年を記念して、2022年10月14日に2時間スペシャルとして放送された。テレビ東京の所蔵する東海林の歌唱映像とともに、東海林の人生を振り返る内容であり、刑部芳則と東海林と親交のあった歌手・田代美代子がゲスト出演した。
- (22) 寺山修司は、詩人、劇作家として活躍した人物であるが、「時には母のない子のように」「戦争は知らない」「浜昼顔」等の流行歌の作詞をしたことから、作詞家としての側面を顧慮し、本稿では北東北の音楽家博物館の1例として列挙した。
- (23) 野村胡堂は、作家として活動する一方で、あらえびすの筆名を用い音楽評論家としても多くの著作を残した。歌手、作詞家、作曲家ではないものの、野村胡堂・あらえびす記念館にはレコード、蓄音機をはじめ多くの音楽資料が収蔵されているため、本稿では北東北の音楽家博物館の1例として列挙した。

## 参考文献

- 秋田県立博物館 1998『秋田県立博物館館報 平成9年度』秋田県立博物館。
- 秋田魁新報社 1972a「静かな東海林太郎ブーム 県内“めい福”祈るようにレコード売り切れ 30代から60代まで」『秋田魁新報』10月10日夕刊 p.3。
- 秋田魁新報社 1972b「東海林太郎さんの銅像を 建立の機運高まる 県内関係者やファンから」『秋田魁新報』10月17日夕刊 p.5。
- 秋田魁新報社 1974a「大々的な追悼公演を計画 若手歌手ら自前で参加 顕彰碑建立募金に協力 4月21日能代市で」『秋田魁新報』3月5日夕刊 p.3。
- 秋田魁新報社 1974b「顕彰碑建設の募金に協力 能代で東海林太郎の追悼公演」『秋田魁新報』4月22日夕刊 p.2。
- 秋田魁新報社 1975「“不滅の歌手”をしのぶ 東海林太郎顕彰碑の除幕式」『秋田魁新報』5月24日朝刊 p.13。
- 朝日新聞社 1984「東海林先生の感動いまも「歌こそ我がいのち」 藤田まこと 再演を語る」『朝日新聞』10月2日東京夕刊 p.11。
- 朝日新聞社 1997「東海林太郎、来年で生誕100年 祭りでブーム起こせ／秋田」『朝日新聞』10月8日秋田朝刊 p.1。
- 朝日新聞社 1998a「東海林太郎の「生誕100年」展 県立博物館／秋田」『朝日新聞』4月27日秋田朝刊 p.1。
- 朝日新聞社 1998b「東海林太郎さんしのび、あの名曲みんなで歌おう 県民会館で／秋田」『朝日新聞』10月3日秋田朝刊 p.1。
- 朝日新聞社 2004a「東海林太郎しのび音楽祭 故郷・秋田で開催 来月33回忌／秋田」『朝日新聞』9月26日秋田朝刊 p.37。
- 朝日新聞社 2004b「懐かしの歌、ファン手拍子 東海林太郎音楽祭／秋田」『朝日新聞』10月4日秋田朝刊 p.27。
- 朝日新聞社 2005a「東海林太郎愛用品ズラリ 音楽館オープン」『朝日新聞』8月3日秋田朝刊 p.27。
- 朝日新聞社 2005b「(青鉛筆) 東海林太郎しのび燕尾服で40人熱唱 秋田」『朝日新聞』8月22日朝刊 p.31。
- 朝日新聞社 2008「昭和の人気歌手「上原敏」記念展 浅草、きょうまで」『朝日新聞』5月23日東京朝刊 p.31。
- 朝日新聞社 2014「「あ、上野駅」里帰り 作詞した故関口義明さん 故郷・羽生に石碑」『朝日新聞』4月11日東京朝刊 p.27。
- 朝日新聞社 2017「わらび座ミュージカル 秋田できょう開幕 東海林太郎 激動の人生描く「歌に真っすぐな姿見てほしい」」『朝日新聞』11月5日秋田朝刊 p.27。
- 朝日新聞社 2018「東海林太郎が贈った日章旗 展示へ 秋田の音楽館、湯沢の夫妻から寄贈受け」『朝日新聞』2月16日秋田朝刊 p.28。
- 朝日新聞社 2020「東海林太郎 故郷に直立像を 等身大「気さくな人柄」示すデザイン」『朝日新聞』2月20日秋田朝刊 p.23。
- 阿部勘一 2021「ウィーンおよびウィーンの著名人における観光資源としての顕彰・展示にかんする一考察」『成城大学経済研究』第234号 成城大学経済学会 pp.241-271。
- 石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編 2013『ポピュラー文化ミュージアム—文化の収集・共有・消費』ミネルヴァ書房。
- 井上裕太 2015「音楽家顕彰活動における博物館の関わり—秋田県出身の流行歌手・東海林太郎と上原敏の事例を中心に—」『國學院雑誌』第116巻第5号 國學院大學総合企画部 pp.1-17。
- 井上裕太 2016「音楽による地域振興と博物館の役割」『國學院大學大學院紀要—文学研究科—』第47輯 國學院大學大學院 pp.181-201。
- 井上裕太 2017「ポピュラー音楽博物館の過去・現在・未来—美空ひばりと石原裕次郎の展示施設を事例として—」『國學院雑誌』第118巻第11号 國學院大學総合企画部 pp.297-315。
- 井上裕太 2022「音楽資料の分類と我が国における音楽博物館の特徴」『現代の図書館』vol.60 no.1 日本図書館協会 pp.20-27。
- 大倉昭 2012『舟木一夫の青春賛歌 芸能生活50周年記念・公式バイオグラフィー』産経新聞出版。
- 佐藤清一郎 1976『秋田県興行史 映画街・演劇街』みしま書房。
- 東海林太郎・岩間芳樹 1984『一唱民衆 東海林太郎歌謡芸術保存会。
- 東海林太郎歌謡芸術保存会 1974『みどりの蔭』No.19 東海林太郎歌謡芸術保存会。
- 東海林太郎顕彰会 2002『東海林太郎資料展示会』リーフレット 東海林太郎顕彰会。
- 第29回国民文化祭秋田市実行委員会 2014『～つなごう東海林太郎の人と歌～東海林太郎音楽祭』チラシ 第29回国民文化祭秋田市実行委員会。
- 第29回国民文化祭秋田市実行委員会事務局 2015『第29回国民文化祭・あきた2014 秋田市公式記録』第29回国民文化祭秋田市実行委員会事務局。
- 浜松市立伊佐見小学校 1989『熱き思いで浜名湖を…… 清水みのるの部屋 開設記念集』浜松市立伊佐見小学校。
- 毎日新聞社 1993「[話の港] 秋田の故東海林太郎さんの顕彰碑に近づく」と歌声が流れる音楽装置完成」『毎日新聞』5月20日東京夕刊 p.15。
- 毎日新聞社 1997「[近県ニュース] 東海林太郎生誕100年祭の前夜祭——秋田／宮城」『毎日新聞』12月29日宮城朝刊 p.1。
- 毎日新聞社 1998a「「東海林太郎さんそっくり大賞」、水沢重悦さんにグランプリ／秋田」『毎日新聞』8月1日秋田朝刊 p.1。
- 毎日新聞社 1998b「[虹模様] レトロな「東海林ビール」——田沢湖町／秋田」『毎日新聞』9月4日秋田朝刊 p.1。
- 毎日新聞社 1998c「東海林太郎さん、いつまでも…生誕100周年、記念曲を熱唱——秋田市／秋田」『毎日新聞』12月13日秋田朝刊 p.1。
- 毎日新聞社 2006「雑記帳：えんぴつと直立不動の歌唱で知られる…」『毎日新聞』6月30日東京朝刊 p.31。
- 毎日新聞社 2014a「東海林太郎：ゆかりのピアノ、80年経

- て故郷に 寄贈受け整備へー秋田・音楽館／秋田』『毎日新聞』6月28日秋田朝刊 p.25。
- 毎日新聞社 2014b「東海林太郎：プロ入りきっかけに 歌コン入賞のはがき寄贈 秋田の音楽館に「貴重な財産増えた」／秋田』『毎日新聞』9月27日秋田朝刊 p.22。
- 毎日新聞社 2021「東海林太郎像：美しい立ち姿、後世に 秋田市文化創造館 「国民的歌手」東海林太郎像建立／秋田』『毎日新聞』4月1日秋田朝刊 p.21。
- 毎日新聞社 2022「顕彰碑お別れ会 羽生出身・故関口さん作詞「あゝ上野駅」「金の卵」惜別の熱唱』『毎日新聞』6月6日埼玉朝刊 p.23。
- 水嶋英治 2000「フランスにおける博物館政策と音楽博物館」『昭和音楽大学研究紀要』19号 昭和音楽大学 pp.169-186。
- 村田麻里子 2016「ポピュラー文化を展示するースポーツ・マンガ・ポピュラー音楽を事例にー」『関西大学社会学部紀要』第47巻第2号 関西大学社会学部 pp.19-43。
- 山田晴通 2013「立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型」『東京経済大学人文自然科学論集』第134号 東京経済大学人文自然科学論集編集委員会 pp. 3-23。
- 読賣新聞社 1983a「男心に男がほれエてエ 藤田まことそっくり芝居「歌こそ我がいのち」来月は東京公演 東海林太郎に歌まで似せて」『読賣新聞』2月24日夕刊 p.13。
- 読賣新聞社 1983b「藤田まことが「東海林太郎」一代記 波乱の人生を歌と芝居で 顔も声もそっくり」『読賣新聞』3月2日夕刊 p.12。
- 読賣新聞社 2012「没後40年 東海林太郎記念催し きょう秋田 そっくりさん登場」『読賣新聞』6月16日秋田朝刊 p.30。
- 読賣新聞社 2016「裕次郎記念館閉館へ 来年8月末」『読賣新聞』8月2日北海道夕刊 p.11。
- 読賣新聞社 2021「東海林太郎の立像完成 代名詞「直立不動」再現 秋田で功績たたえる」『読売新聞』3月28日秋田朝刊 p.31。
- 和田崇 2017「ひろしま神楽の商品化・観光化」『ライブパフォーマンスと地域ー伝統・芸術・大衆文化ー』（神谷浩夫・山本健太・和田崇編）ナカニシヤ出版 pp.14-30。